
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第64集

割山遺跡（第6次）/市内遺跡確認

— 深谷市内遺跡 XII —

2000.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第64集

割山遺跡（第6次）/市内遺跡確認

— 深谷市内遺跡 XIII —

2000.3

深谷市教育委員会

序

このたび、深谷市教育委員会では、「割山遺跡（第6次）／市内遺跡確認」の発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。

今回の割山遺跡の発掘調査は、個人専用住宅建設工事に先立ち実施いたしましたもので、埴輪窯跡1基、粘土採掘坑2基、土壙1基などが姿を現しました。この遺跡は、深谷市内に存在する唯一の埴輪窯跡として古くから知られ、昭和37年に初めて調査されて以来、度々調査されてきました。その結果、粘土を採掘し、埴輪を作り、焼くまでの作業を一貫してこの場所で行っていたことが明らかになりつつあります。今回の発掘調査でも、埴輪窯跡や粘土採掘坑等が検出されました。調査面積はわずかなものですが、過去の調査による成果と繋ぎ合わせると、埴輪がどのように製作されていたのかが少しずつ浮かび上がってきます。

近年深谷市も、他市町村の例に漏れず、様々な開発が盛んに行われ、遺跡が破壊される危険に直面しております。このような状況の中、失われつつある埋蔵文化財を保護し、後世に伝えていくことは私たちの大きな課題となっております。

今回の発掘調査の成果を報告書というかたちにまとめ、広く市民の皆さんにご紹介することで、郷土の歴史の古さやその優れた文化について、ご理解を深めていただきたいと存じます。また、この報告書が学術研究はもとより、学校、社会教育などの生涯学習活動を通じて文化財保護精神の高揚に役立てば、望外の喜びあります。

最後に、今回の発掘調査および報告書作成にあたり深いご理解とご協力をいただきました松本信幸氏をはじめ、関係者の皆様に心から感謝し、お礼を申し上げまして序にかえさせていただきます。

平成12年3月

深谷市教育委員会

教育長 中村克彦

例　　言

1. 本書は、埼玉県深谷市大字上野台字割山2833-12、2888-4に所在する削山遺跡の発掘調査報告書である。事業名は、削山遺跡第6次発掘調査とした。また、平成11年度深谷市内遺跡確認調査についても掲載した。
2. 削山遺跡発掘調査（以下、発掘調査とする）は、個人専用住宅の建築に伴う事前調査であり、平成11年度市内遺跡発掘調査として行われた。
3. 発掘調査は、深谷市教育委員会が主体となって実施し、調査費用については、国庫及び県費の補助金を受けた。
4. 発掘調査期間は、平成11年4月20日から平成11年4月30日までである。
5. 発掘調査及び出土遺物の整理は知久裕昭が担当した。
6. 本書に掲載した鉢図類の縮尺は、原則としては次のとおりである。

遺構　埴輪窯跡・粘土採掘坑・土壙1/40

遺物　埴輪・土師器1/4、縄文土器1/3

7. 遺跡原点は、国家方眼座標X=20210.000、Y=-49604.000である。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。
8. 基準点測量に際しては、深谷市管理課の協力を得た。
9. 遺構実測図中の水系レベルは、標高57.000mに統一した。
10. 遺物の注記、および原図における遺構の略号は次のとおりである。
埴輪窯跡…S S、粘土採掘坑…S C、土壙…S K
11. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、次の諸氏から数々のご指導ご助言を賜った。
今井 宏　　大谷 徹　　澤出兄越（敬称略）

発掘調査の組織

調査主体者	深谷市教育委員会	教育長	中村克彦
		教育次長	逸見 稔
事務局	深谷市教育委員会社会教育課	課長	根松文良
		課長補佐	金川秀夫
		文化財保護係長	石川 博
		主任	古池晋祿
		主事	青木克尚
		主事	富田和利
調査担当者		主事	知久裕昭

調査参加者

阿部ルリ子	池田敦子	大沢日出子	大澤大美	大原黎子	小野寺和子
河合詔子	久米紀子	小沼和子	鳥津芳子	砂田伊久子	高田秀子
滝沢はつえ	田中美樹	知久祥子	都築百合子	橋橋道子	根本智子
浜野光子	木橋玲子	森 光代	諸岡美樹子	吉野真由美	

目 次

序

例言

発掘調査の組織

I	発掘調査の経過	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	発掘調査の経過	1
II	深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相	2
III	遺構と遺物	5
1	埴輪窯跡	5
2	粘土採掘坑	11
3	上塙	14
4	グリッド出土遺物	15
5	縄文土器	19
IV	市内遺跡確認調査	20
1	幡屋館跡	20
2	町田西遺跡	22
V	新語	23
	報告書抄録	26

挿図目次

第1図	荆山遺跡及び周辺の遺跡分布図	3
第2図	荆山遺跡の位置と発掘調査区	4
第3図	荆山遺跡全体測量図	5
第4図	第1号埴輪窯跡実測図	6
第5図	第1号埴輪窯跡出土遺物（1）	8
第6図	第1号埴輪窯跡出土遺物（2）	10
第7図	第1、2号粘土採掘坑実測図（1）	12
第8図	第1、2号粘土採掘坑実測図（2）	13
第9図	第3号粘土採掘坑実測図	14
第10図	粘土採掘坑出土遺物（1）	15
第11図	粘土採掘坑出土遺物（2）	16
第12図	粘土採掘坑出土遺物（3）	17
第13図	第1号上塙及び出土遺物	17
第14図	グリッド出土遺物	18
第15図	縄文土器拓影図	19
第16図	幡屋館跡の位置と概要図	20
第17図	幡屋館跡確認調査出土遺物	20
第18図	町田西遺跡の位置と概要図	21
第19図	町田西遺跡確認調査出土遺物	22
第20図	荆山遺跡遺構分布図	24
第21図	荆山遺跡概要図	25

図版目次

図版 1	調査区全景	図版 6	第 2 号粘土採掘坑 6
図版 2	第 1 号埴輪窯跡遺物出土状況		第 2 号粘土採掘坑 7
	第 1 号埴輪窯跡、第 3 号粘土採掘坑	図版 7	第 1 号粘土採掘坑 1
図版 3	第 1 、 2 号粘土採掘坑		グリッド出土遺物
	第 2 号粘土採掘坑遺物出土状況		縄文土器
図版 4	第 1 号埴輪窯跡 1	図版 8	幡籠館跡確認調査出土遺物（1）
	第 1 号埴輪窯跡出土遺物（1）		幡籠館跡確認調査出土遺物（2）
	第 1 号埴輪窯跡出土遺物（2）		町田西遺跡確認調査出土遺物
図版 5	第 2 号粘土採掘坑 1		
	第 2 号粘土採掘坑 3		
	第 2 号粘土採掘坑出土遺物		

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

深谷市は埼玉県北部に位置する、総面積69.4km²、人口約104,000人の都市である。当地は農業、工業とともに盛んで、古くから深谷ネギの産地としても有名である。歴史的に見ても、縄文、弥生時代をはじめ、古墳時代～平安時代、深谷上杉氏の拠点であった室町時代、戦国時代、宿場町として栄えた江戸時代、そして近現代まで多くの遺跡、文化財が残され、非常に重要な土地であったことが窺える。近代日本経済界を築いた浅沢栄一の生地としても良く知られる。

現在、市のほぼ中央に国道17号線、JR高崎線が東西に併走し、その沿線を中心として古くからの市街地が広がる。そして近年は、JR高崎線の南を走る南大通り線の周辺の地域が、特に開発が目立つ場所である。割山遺跡は主に、こうした開発に伴って調査が行われ、その回数も今回で既に6度目を数える。

割山遺跡はJR深谷駅より南へ約0.8km、櫛挽台地標高の北端部に立地する。標高は約56mである。当該遺跡は昭和37年に初めて発掘調査されて以来、深谷市における唯一の埴輪製作跡であり重要な遺跡の一つとして認識されてきた。そのため市教育委員会は、事前の確認調査などを実施してきた。

平成10年11月20日、大字上野台字割山2833-12,2888-4で個人専用住宅の建築が明らかとなり、市教育委員会は申請者の松本信幸氏との協議を経て、平成11年1月26日に当該地の確認調査を実施した。調査の結果、大部分で埴輪窯跡、粘土採掘坑等の遺構や、埴輪、土師器等の遺物を検出した。この結果を踏まえ、発掘調査の実施について、市教育委員会と原因者側とで協議を行い、深谷市教育委員会が主体となって発掘調査を実施することで合意した。

深谷市教育委員会は、文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づき、平成11年4月6日付けの深教社発第20号で埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁長官宛提出

出し、準備に入った。

なお、埼玉県教育委員会教育長から、平成11年4月14日付けの教文第3-8号で指示通知を受けた。

2 発掘調査の経過

割山遺跡第6次発掘調査の経過は、概ね以下の通りである。

- 4月15日（木）表土剥ぎ、発掘調査準備。
- 4月16日（金）発掘調査準備、器材搬入。
- 4月19日（月）雨のため中止。
- 4月20日（火）遺構確認作業、遺構調査。
- 4月21日（水）遺構調査。
- 4月22日（木）遺構調査、基準点測量。
- 4月23日（金）遺構調査。
- 4月26日（月）遺構調査、実測。
- 4月27日（火）遺構調査、実測、写真撮影。
- 4月28日（水）遺構調査、実測、写真撮影。
- 4月29日（木）遺構調査、実測、写真撮影。
- 4月30日（金）実測、写真撮影、器材搬出。

調査面積は約80m²と狭小ながら、1基の埴輪窯跡、3基の粘土採掘坑、1基の土壙、多くの埴輪や土師器、绳文土器等が出土し、大きな成果を得ることができた。粘土採掘坑の調査では、雨によって非常に滑りやすい状況であったが、発掘作業に参加された方々の努力により、これらの成果が得られた。深く感謝の意を表する。

II 深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相

深谷市の地形を概観すると、市のほぼ中央部を東西に通るJR高崎線付近を境として、南側に櫛挽台地が広がり北側には妻沼低地が形成されている。櫛挽台地は荒川によって作られた古い扇状地が侵食されてできた沖積台地で、寄居付近を頂部としている。妻沼低地は、利根川の自然堤防及び沖積低地であり、加須低地と並び利根川の中流低地の一つに数えられる。

櫛挽台地は構造的には、西北側の武藏野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、東南側の立川面に比定される寄居面（御陵城原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼJR高崎線沿いの岸線で比高差5~10mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線より北へ1.5~1.8mほど延びていて、比高差2~5mをもって妻沼低地と接している。接線付近での標高は櫛挽面が10~50m、寄居面が32~36m、妻沼低地が30~31mである。櫛挽面は標高70m付近より発する上唐沢川、押切川、戸田川、唐沢川等が北流していく、最近の発掘調査でも埋没谷等が検出され、櫛挽面北端部は南北に台地を開析する深い谷が発達したものと考えられる。また、末端には所謂先端湧水と認められる池などもある。寄居面にはこうした谷筋はほとんど認められず、妻沼低地と接する台地末端部を除き、水利上は生活に不向きだったと考えられる。

妻沼低地は、利根川右岸に広がる肥沃な低地である。南は熊谷市付近を境として秩父山塊に連なる丘陵、台地と大宮台地に挟まれた荒川低地に続き、東は加須低地に接する。妻沼低地の南端に櫛挽面、東に寄居面を控える一画に深谷市の中心部があり、周辺では住宅地が急増している。妻沼低地は現在ではかなり平坦であるが、利根川の氾濫や流路の変遷等により、自然堤防が発達したものと考えられる。

深谷市内では、旧石器時代の遺跡はまだ確認されていないが、縄文時代以降の遺跡は数多く確認されている。以下、割山遺跡及び周辺遺跡の様相を概観してい

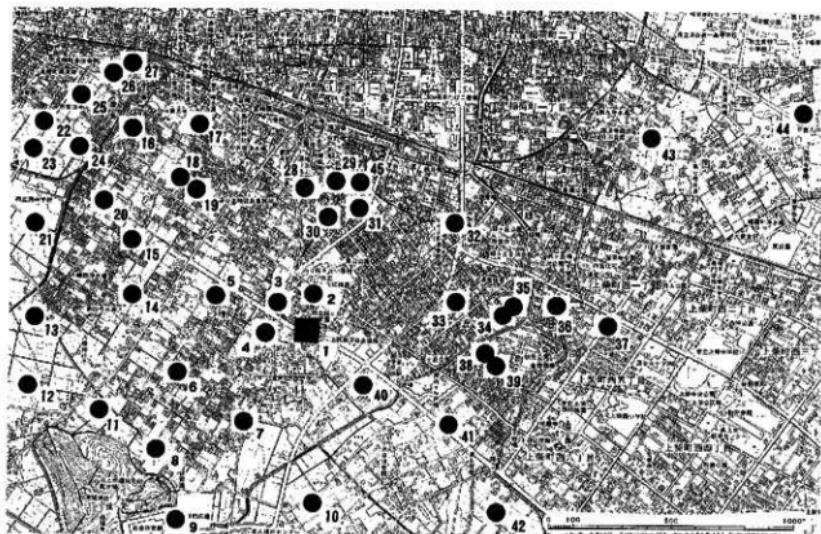
こうと思う。

割山遺跡は櫛挽台地の櫛挽面に立地し、規模は22,000m²と推定される。埴輪製作に関連する遺構の他に、中世の遺構や縄文前期の土器片等が出土している。

縄文時代の遺跡は、櫛挽台地上に数多く分布する。縄文前期は、台地の先端部にある常盤町東遺跡で、諸磯a式期の埋甕が1基検出されている。しかし、台地の中心部では現在のところ遺構が検出された遺跡は無く、ほとんどは縄文中期を主体とするものである。中でも最も大きい集落として41の小台遺跡が挙げられる。小台遺跡は多量の土器、石器を含む埋没谷を中心に、住居跡や土壙が展開する。これらの遺構は縄文中期葉～後期前葉までのものがこれまでに検出されているが、縄文前期の黒浜式～猪俣b式の土器片も少量ながら検出されている。位置的にも割山遺跡に近く、近辺に縄文前期の集落が営まれていたことが考えられる。割山遺跡における前期の土器の出土量は比較的大く、或いは古墳時代や中世等の土地開発により遺構の多くが破壊された可能性も考えられる。

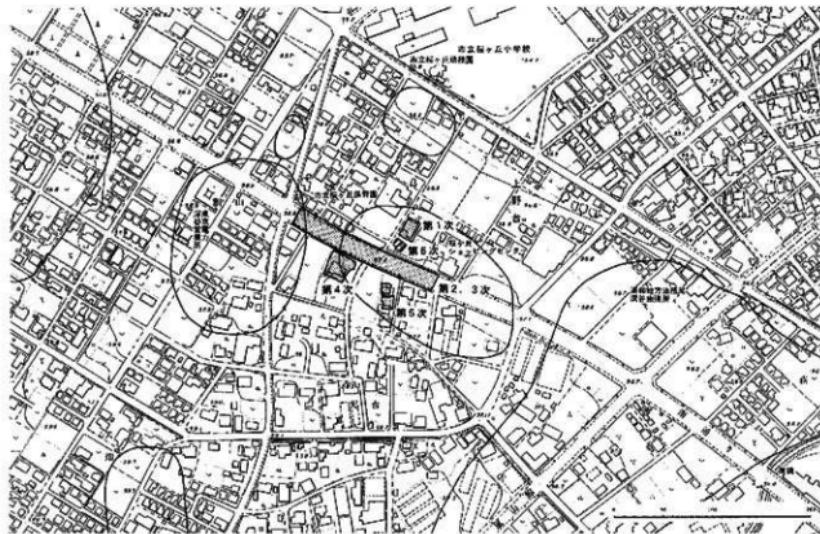
縄文後、晩期になると、縄文人の生活域は櫛挽台地から妻沼低地へと移っていく。明戸東遺跡では後期初頭の住居跡、上敷免北遺跡では後期後葉の遺物包含層が検出されるなどしている。そして上敷免遺跡では、包含層から在地の後、晩期の資料に混じり、東海系条痕文土器が検出されたり、埼玉県では初の違賀川系の甕が検出されるなど、他地域との交流を考えさせられる。また遺構が検出されなくても、妻沼低地にある遺跡を調査すると、ほとんどの場合に縄文後期の土器片が検出される状況である。

弥生時代に入ると、上敷免遺跡で中期の再葬墓と若干時期が下る住居跡が同一の自然堤防上に確認され、弥生時代の集落の在り方を考え上で注目される。弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡の分布状況は明確ではないが、古墳時代前期の遺跡は最近調査例が増え



第1図 割山遺跡及び周辺の遺跡分布図

- 1. 割山遺跡 繩文前期、古墳後期、中世
- 2. №210遺跡 繩文後期
- 3. №211遺跡 古墳前・後期
- 4. 割山西遺跡 繩文前・中期、古墳後期～中世
- 5. 鼠裏遺跡 繩文中期、奈良～近世
- 6. №78遺跡 繩文中期
- 7. №217遺跡 繩文前・中期、古墳後期～平安
- 8. №77遺跡 繩文中期、古墳後期～平安
- 9. 押切遺跡 中世
- 10. №96遺跡 繩文中期
- 11. №218遺跡 繩文中期
- 12. 山根遺跡 繩文・後期
- 13. №69遺跡 繩文中期、奈良
- 14. №68遺跡 古墳後期～平安
- 15. №67遺跡 繩文中期、古墳後期～平安
- 16. №65遺跡 古墳後期～平安
- 17. №64遺跡 繩文中期
- 18. №214遺跡 繩文
- 19. №66遺跡 古墳後期～平安
- 20. №215遺跡 繩文中期
- 21. 岑場松原遺跡 繩文中期
- 22. №33遺跡 古墳後期～平安
- 23. №220遺跡 繩文前・中期
- 24. №221遺跡 弥生中期
- 25. №222遺跡 繩文
- 26. №32遺跡 繩文中期
- 27. №31遺跡 古墳後期
- 28. №81遺跡 弥生中期、古墳後期～平安
- 29. №118遺跡 古墳前期、平安
- 30. №212遺跡 古墳後期
- 31. №82遺跡 古墳後期～平安
- 32. №83遺跡 古墳後期～平安
- 33. №84遺跡 繩文中期、古墳後期～平安
- 34. №85遺跡 繩文後期
- 35. 桜ヶ丘組石遺跡 繩文後期
- 36. №87遺跡 繩文後期
- 37. №88遺跡 古墳後期～平安
- 38. №208遺跡 繩文中期、古墳前・後期、平安
- 39. 秋元氏館跡 中世
- 40. №209遺跡 繩文中期、古墳後期
- 41. 小台遺跡 繩文前～後期、古墳後期～平安
- 42. №93遺跡 繩文中・後期、古墳後期～平安
- 43. №250遺跡 奈良、平安
- 44. 庁鼻和城跡 中世
- 45. №213遺跡 繩文中期



第2図 割山遺跡の位置と発掘調査区

ている。古墳時代中期は遺跡数が減少するものの、最近、戸森前遺跡や皿沼西遺跡等で住居跡が検出されている。

古墳時代後期になると遺跡数は爆発的に増加し、妻沼低地の自然堤防上に大規模な集落が営まれる。また、この時期に小規模な円墳が數多く造られるようになり、いくつかの古墳群を形成する。中でも代表的なのは、深谷市の中央付近、櫛挽台地の先端部に形成される木の本古墳群である。この古墳群のいくつかは過去に調査されている。出土した埴輪を観察すると、胎土や作りの特徴が、割山遺跡で出土した埴輪と類似しており、割山遺跡で製作された埴輪が、木の本古墳群に供給されていたことが考えられる。結論づけるには他窯跡の資料との対比等より細かい分析を要するが、地理的にも比較的近く、仮説として有力である。櫛挽台地には当時もいくつかの川が流れているものと考えられ、こうした川の流れを利用して、完成した埴輪は下流へと運搬されていったものと思われる。

奈良、平安時代の遺跡はそれまでと同様の分布状況を示すが、10世紀代以降の遺跡の分布はそれまでは異なり、遺跡の確認数が減少する。これは遷地による生活域の変化の他に、堅穴遺構の減少や後年の土取り等の影響で遺構が消滅してしまったこと等が考えられる。

平安時代末期以降は、猪俣党武士団の居館が各地に出現する。割山遺跡から割山西遺跡にかけて存在する館跡は、この時代に營まれたものと考えられている。そして室町時代以降は深谷上杉氏の所領となる。深谷上杉氏は、当初44の庄屋と城跡に居を構えるが、5代目の房兼の時に、古河公方勢力との熾烈に備え、より堅固な深谷城に移ったとされる。この頃の遺跡としては、深谷上杉氏の家臣の館跡である39の秋元氏館跡、古河公方勢力を牽制し、入見地域を防衛するために築かれたと考えられている館跡が検出された9の押切遺跡が挙げられる。

III 遺構と遺物

1 填輪塞跡

第1号捕蟾窓跡（第4180）

調査区の南壁際で検出された。第2、3号粘土探掘坑と切り合う。新旧関係は第3号粘土探掘坑→第1号埴輪窯跡→第2号粘土探掘坑である。幅は最長部で約2.45mを測る。確認面から底面までの深さは、調査区壁の部分で0.34m、第2号粘土探掘坑に切られる付近で0.19mと、0.15m後者の方が高くなつており、それ程強くはないものの傾斜をなす。この事から、調査されたのは登窯の先端部であると考えられる。焚口には、放棄された第3号粘土探掘坑の碎みが利用されたものと思われる。炭化物が埋土全体に堆積し、焼土は底面付近に3~5cmの厚さでブロック状に検出されたが、

底面や側壁はあまり焼けていなかった。主軸はほぼ北を向く。

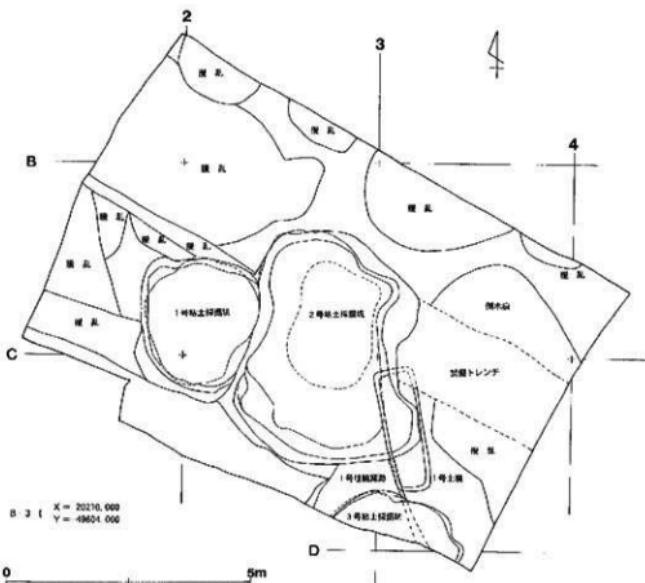
遺物は完形のものは皆無で、表面が剥落するなどしたものが比較的多く認められる。また埴土と遺物の一部が、第2号粘土探査坑内に流れ込んでいる状況も確認された。(第7~8図参照)

第1号埴輪窯跡出土遺物（第5～6図）

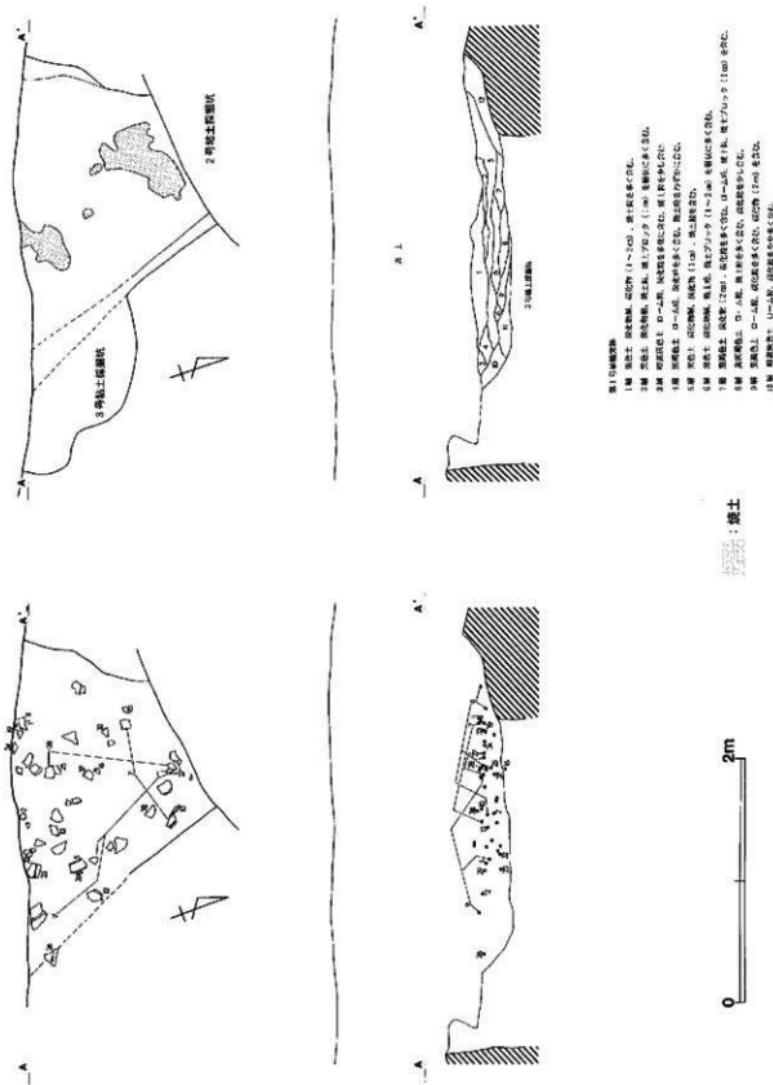
1は、本構造の底面付近の調査区壁面から出土した、完形の土師器壺である。口径14.4cm、器高4.6cmを測る。焼成は良好、色調は赤褐色を呈し、胎土に白、黒色鉱を含む。

2～4は形象埴輪である。

2は家形埴輪のユーナー部分であろう。内外面とも
3本/cmの継ぎ刷毛整形である。色調は昭和色を以て



第3図 割山遺跡全体測量図



第4図 第1号埴輪窓跡実測図

胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。3は馬形埴輪のたてがみ部分であろうか。色調は明橙色を呈し、白、赤色粒、砂礫を含む。刷毛は4本/cmである。

4は矛先か抜き身の劍と思われる。昭和53年に行われた第2次調査でも、類似資料が数点出土している。色調は赤褐色を呈し、胎土に白色粒を含む。

5は朝顔形埴輪である。胴下半の最小径部と最大径部に突帯が巡る。外面は5本/cmの縦位刷毛整形、内面はなでによる整形である。色調は橙色を呈し、胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。第2号粘土探掘坑出土埴輪と接合する。

6～40は円筒埴輪である。

6は2条の突帯が巡る資料である。残存率20%、推定口径23.4cmを測る。外面は4本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。焼成は良好、色調は赤褐色を呈し、胎土に白、黒、赤色粒、砂礫と微量の金雲母を含む。

7は推定口径24.0cmを測る。外面は5～6本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。色調は明橙色を呈し、胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。

8は突帯が水平に貼付されていない。推定口径25.6cmを測る。外面は5本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。色調は明橙色を呈し、胎土に白、黒、赤色粒、砂礫を含む。透孔の上部のみ残存する。

9は外面は3～4cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。明橙色を呈し、胎土に白、黒、赤色粒、砂礫を含む。

10は断面二角形の突帯を有する。透孔の下部のみ残存する。外面は3～4本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。色調は橙褐色を呈し、胎土に赤、白色粒を含む。第2号粘土探掘坑出土埴輪と接合する。

11は推定底径12.0cmを測る。外面は3本/cmの縦位刷毛整形、内面は縦位刷毛整形の後になでが加えられる。焼成は不良、色調は明橙色を呈し、胎土に白、赤色粒、砂礫を含む。

12～16は口縁部である。

12は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面は横～斜位の

刷毛整形である。明橙色を呈し、胎土に白、黒、赤色粒、砂礫を含む。

13は外面が4本/cmの縦位刷毛であり、内面は斜位刷毛整形後に部分的ななでが加えられる。焼成は不良で、色調は赤褐色を呈する。胎土に白、黒、赤色粒、砂礫を含む。第2号粘土探掘坑出土埴輪と接合する。

14は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面は横位刷毛整形である。色調は橙色を呈し、胎土に白、黒、赤色粒、砂礫を含む。

15は外面が3～4本の縦位刷毛整形の後に横位のなでが加えられる。内面は横位刷毛整形である。色調は明橙色を呈し、胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。

16は外面は3～4本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。焼成は良好、色調は赤褐色を呈し、胎土に白、黒、赤色粒を含む。

17～34は胴部破片である。

17は外面が3～4本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形後になでが加えられる。色調は赤褐色を呈し、胎土に白、黒色粒を含む。

18は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛の後になでが加えられる。色調は明橙色を呈し、胎土に白、黒、赤色粒、砂礫を含む。

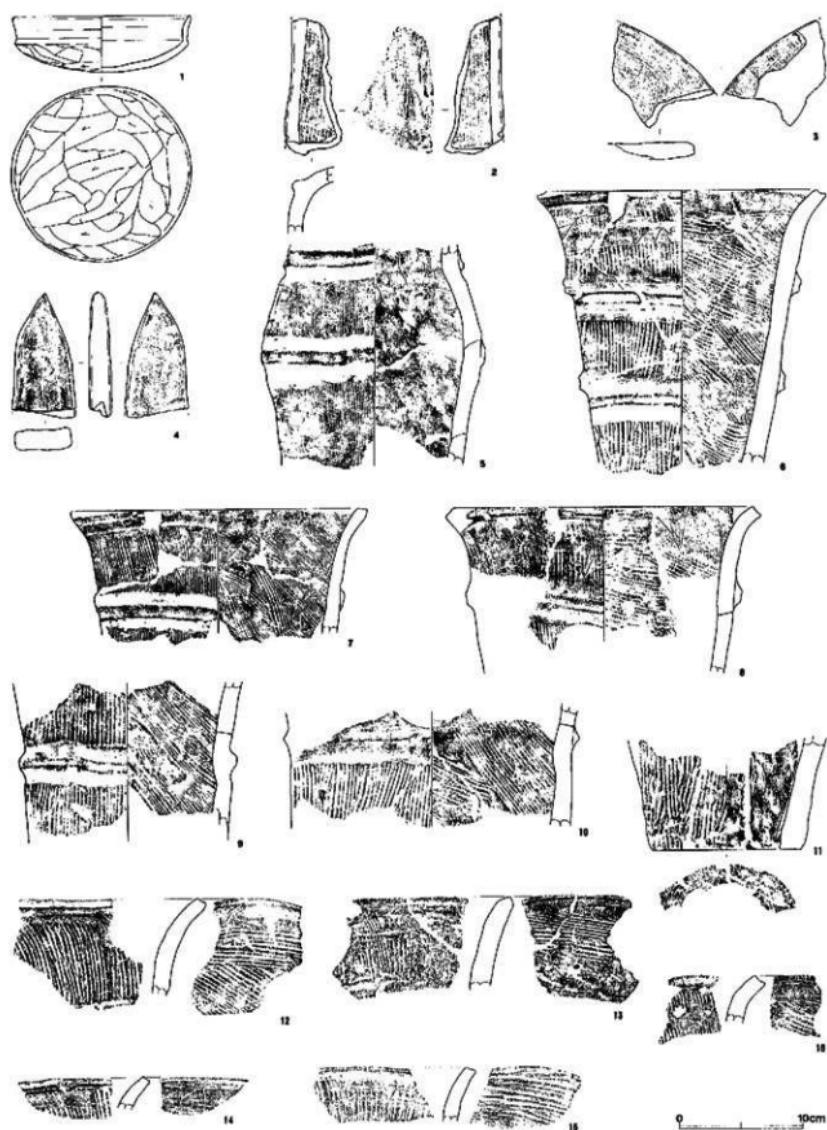
19は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛の後に縦位のなでが加えられる。色調は明橙色、胎土に黒、白色粒、砂礫を含む。

20は外面が4本/cmの縦位刷毛整形である。内面は摩耗が激しいが斜位の刷毛目が看取される。焼成は不良、色調は薄い赤褐色を呈し、胎土に黒、白色粒、砂礫を含む。

21は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面はなで整形である。色調は明橙色を呈し、胎土に白色粒、砂礫を含む。

22は外面が4本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。色調は橙色を呈し、胎土に白色粒、砂礫を含む。

23は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。焼成は不良、色調は明橙色を呈し、胎土に白、赤色粒、砂礫を含む。



第5圖 第1号埴輪窯跡出土物(1)

24は幅広で偏平な突堤を有する。外面は6本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛の後にながれ加えられる。

色調は橙色を呈し、胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。

25は外面が5本/cmの縦位刷毛、内面は縦～斜位刷毛整形である。焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。

胎土に白色粒、砂礫を含む。

26は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。焼成は不良、色調は明橙色を呈し、胎土に白、赤色粒、砂礫を含む。

27は外面が3～4本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。色調は明橙色を呈し、胎土に白色粒、砂礫を含む。

28は外面の剥落が著しい。外面は3本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。焼成は不良、色調は明橙色を呈し、胎土に白色粒、砂礫を含む。第2号粘土探査坑出土埴輪と接合する。

29は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。焼成は不良、色調は明橙色を呈し、胎土に白、赤色粒、砂礫を含む。

30は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面はなで整形である。色調は明橙色を呈し、胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。第2号粘土探査坑出土埴輪と接合する。

31は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。焼成は良好、色調は赤褐色を呈し、胎土に白、赤色粒、砂礫を含む。

32は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。焼成は良好、色調は赤褐色を呈し、胎土に白、黒、赤色粒、砂礫を含む。

33は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。色調は赤褐色を呈し、内面は白、赤色粒、砂礫を含む。

34は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面はなで整形である。焼成は不良、色調は鈍い赤褐色を呈し、胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。

35～40は底部資料である。

35～39は内面が剥落する。

35は外面が3本/cmの縦位刷毛整形である。底面は

棒状工具による調整が加えられる。色調は橙色を呈し、胎土に白色粒、砂礫を含む。

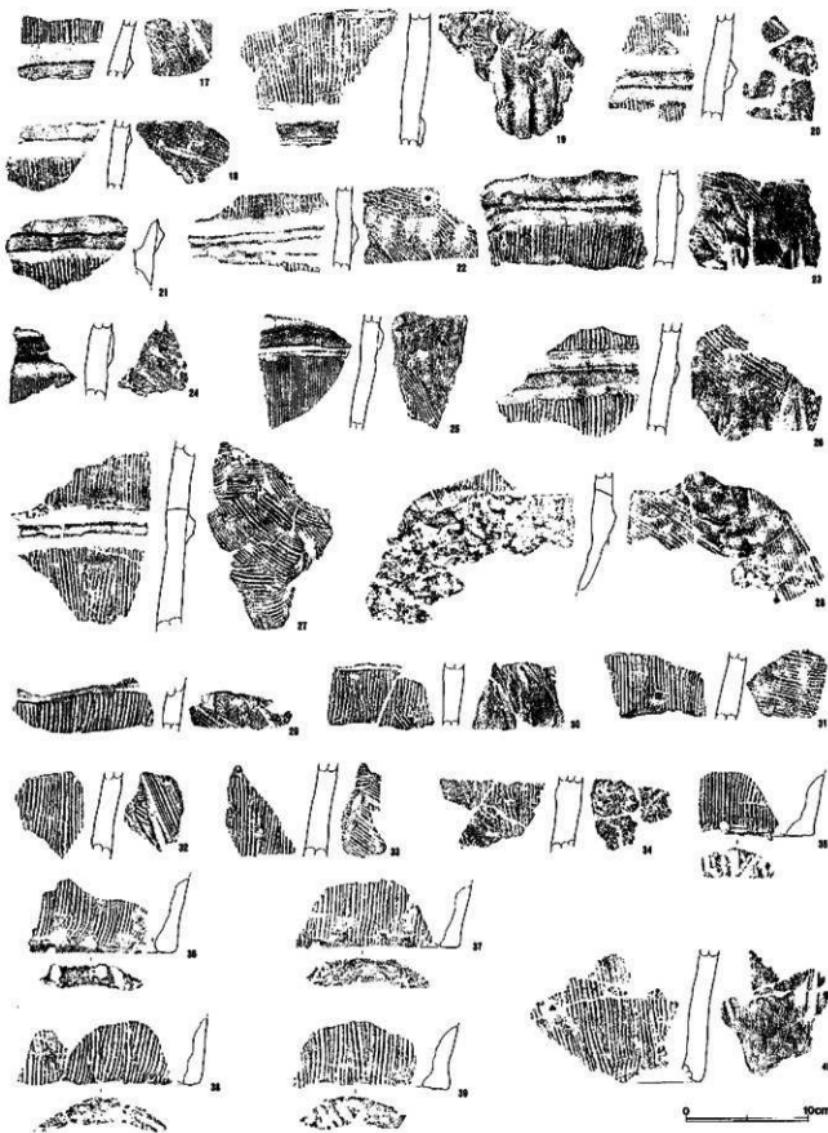
36は外面が3本/cmの縦位刷毛整形である。色調は明橙色を呈し、胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。底面は調整が加えられる。

37は外面が3本/cmの縦位刷毛整形である。色調は明橙色を呈し、胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。

38は外面が3本/cmの縦位刷毛整形である。色調は明橙色を呈し、胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。底面にはわずかに調整痕が認められる。

39は外面が2～3本/cmの縦位刷毛整形である。色調は橙色を呈し、胎土に白色粒、砂礫を含む。底面には調整痕が認められる。

40は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面はなで整形である。焼成は不良、色調は橙色を呈し、胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。第2号粘土探査坑出土埴輪と接合する。



第6図 第1号埴輪窯跡出土遺物(2)

2 粘土採掘坑

第1号粘土採掘坑（第7～8図）

調査区の西側に位置し、第2号粘土採掘坑に切られる。平面形態は不整円形を呈し、直径2.81m、確認面からの深さ0.88mを測る。壁面は急斜面から屈曲し、垂直に掘り込まれる。粘土層を削り込んで部分的にオーバーハングする。底面はほぼ平坦である。底面付近では、水成堆積層が確認された。

第1号粘土採掘坑出土遺物（第10図）

本遺構からは繩文土器が多数出土したが、遺構に伴う時期の遺物はわずかであった。

1は遺構の東南端近くから出土した土師器杯である。口径11.8cm、推定器高4.4cmを測り、残存率40%である。焼成は良好、色調は明橙色を呈し、胎土に白、黒色粒を含む。

第2号粘土採掘坑（第7～8図）

調査区のはば中央に位置し、第1号粘土採掘坑、第1号埴輪窓跡を切る。平面形態は不整橢円形を呈し、長径5.04m、短径3.20mを測る。壁は比較的緩やかな傾斜をもって立ち上がる。深さは中央部分が最も深く、最下部で確認面からの深さは1.36mを測る。しかし湧水が激しかったため、最下部まで調査したのは一部に留まった。下層からは水成堆積層が検出された。また第1号埴輪窓跡の覆土や遺物が流れ込んでいる状況が確認された。

第2号粘土採掘坑出土遺物（第10～12図）

1は土師器杯である。推定口径12.8cm、器高8.3cmを測り、残存率70%である。焼成は良好、色調は赤褐色を呈し、白色粒、石英、砂粒を含む。

2～5は形象埴輪である。

2は直径4.5cm程の円盤を貼付したものである。円盤の表面は比較的丁寧になでられる。鏡を表現しているのであろうか。外面は5本/cmの縦へ斜位刷毛、内面はなで整形である。円盤の下部には斜位の鋸い沈線が施される。焼成は良好、色調は赤褐色を呈し、胎土に

白、黒色粒、砂礫を含む。

3は馬形埴輪の頭の一部である。手綱の部分が表現される。外面は8本/cmの刷毛、内面はなで整形である。色調は赤褐色を呈し、胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。

4、5は鶴の張り出し部であろうか。

4は表面に鋸い沈線が交差して施される。刷毛目は4本/cmである。色調は赤褐色を呈し、胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。

5は表面に鋸い斜沈線が施される。刷毛目は3本/cmである。焼成は良好、色調は赤褐色を呈し、胎土に白色粒、砂礫を含む。4、5とも表面の刷毛目は消えかかっている。

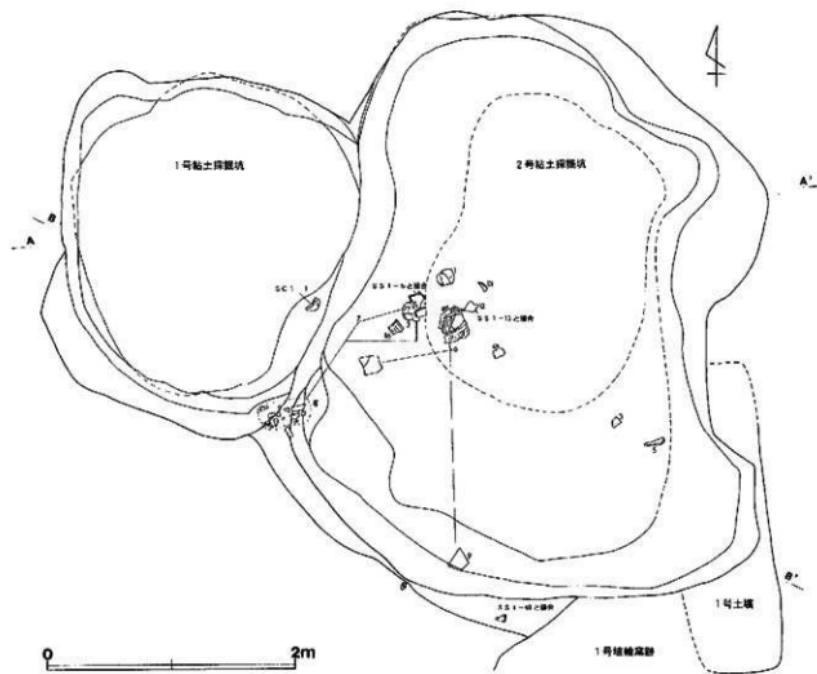
6～20は円筒埴輪である。

6は推定口径29cm、底径12.4cm、器高43.2cmを測る2条突帯をもつ資料である。透孔は2カ所あり、いずれも部分的に遺存する。外面は5本/cmの縦位刷毛、内面は横へ斜位刷毛整形で、指など痕が突帯上や胴下半に不規則に認められる。底面には調整痕がわずかに認められる。内面には炭化物が部分的に付着する。色調は赤褐色を呈し、胎土に白色粒、砂礫を含む。

7は推定口径33cmを測る。透孔は2カ所あり、いずれも部分的に遺存する。突帯は2条認められるが、上部の突帯は大部分が剥落している。焼成は不良で、特に外側の摩耗、剥落が著しい。外面は5本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形で口縁付近で横位刷毛が加えられる。色調は明橙色を呈し、胎土に白色粒、砂礫を含む。

8は2条突帯を有するものと思われる。上部の突帯は口縁に平行に貼付されない。推定口径は24cmを測る。外面は8本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛の後になでが加えられる。焼成は不良で、色調は明橙色を呈する。胎土には白、黒、赤色粒、砂礫を含む。

9は推定底径20cmの底部資料である。外面は5本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。底面にはほとんど調整痕は認められない。色調は明橙色を呈し、胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。



第1号粘土探査坑

- 1層 砂場地：ローム地。底面をわずかに含む。
- 2層 黄褐色：ローム質を含む中砂。
- 3層 深褐色：ローム地。ロームブロック（1～3cm）をやや多く含む。
- 4層 黄褐色：ローム地。ロームブロック（1～3cm）を含む。
- 5層 黄褐色地。コーカ色を含む。
- 6層 黄褐色地。ローム地。ロームブロック（1～3cm）で構成される。泥地。白色土質を多く含む。
- 7層 黄褐色地。ローム地。底面を多く含む。

下層 黄褐色地。ローム地。底面を多く含む。底面を含む。

上層 黄褐色地。ローム地。ロームブロック（1～3cm）を多く含む。白色土質を含む。底面を含む。

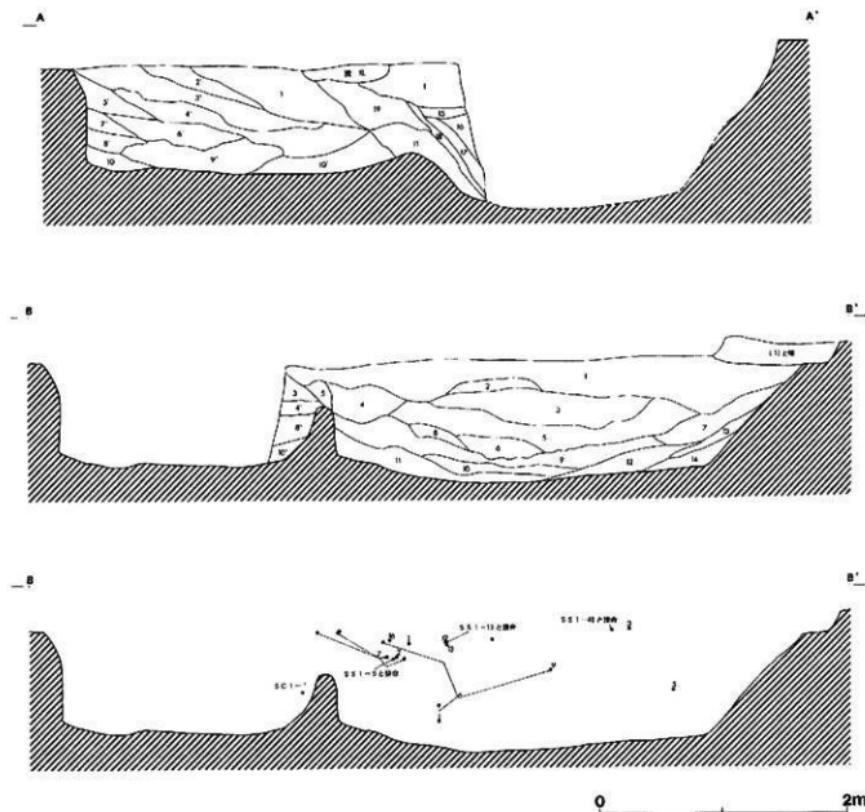
中層 黄褐色地。ローム地。ロームブロック（1～3cm）を多く含む。白色土質を含む。底面を含む。

下層 黄褐色地。ローム地。ロームブロック（1～3cm）を多く含む。白色土質を含む。底面を含む。

第2号粘土探査坑

- 1層 砂場地：ローム地。底面をわずかに含む。
- 2層 黄褐色地：ローム質を含む中砂。
- 3層 黄褐色地：ローム地。底面を多く含む。底面を含む。
- 4層 黄褐色地：ローム地。底面を多く含む。底面を含む。
- 5層 黄褐色地：ローム地。底面を多く含む。底面を含む。
- 6層 黄褐色地：ローム地。底面を多く含む。底面を含む。
- 7層 黄褐色地：ローム地。底面を多く含む。底面を含む。
- 8層 黄褐色地：ローム地。底面を多く含む。底面を含む。
- 9層 黄褐色地：ローム地。底面を多く含む。底面を含む。
- 10層 黄褐色地：ローム地。底面を多く含む。底面を含む。
- 11層 黄褐色地：ローム地。底面を多く含む。底面を含む。
- 12層 黄褐色地：ローム地。底面を多く含む。底面を含む。
- 13層 黄褐色地：ローム地。底面を多く含む。底面を含む。
- 14層 黄褐色地：ローム地。底面を多く含む。底面を含む。
- 15層 黄褐色地：底面を多く含む。
- 16層 黄褐色地：ローム地。底面を多く含む。底面を含む。
- 17層 黄褐色地：ローム地。底面を多く含む。底面を含む。
- 18層 黄褐色地：底面を多く含む。

第7図 第1、2号粘土探査坑実測図(1)



第8図 第1、2号粘土探査坑実測図(2)

10は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。焼成は不良、色調は棕色を呈し、胎土に白、赤色粒、砂礫を含む。

11は溝孔の一部が看取される。内面は4本/cmの斜位刷毛の後、なでが加えられる。色調は明褐色を呈し、胎土に白、赤色粒、砂礫を含む。

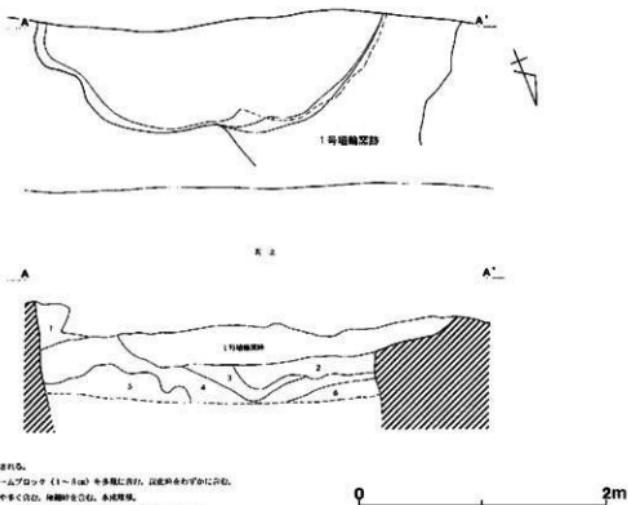
12、13は同一個体と思われる。外面は6本/cmの縦位刷毛、内面はなで整形である。色調は純い赤褐色を

呈し、胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。

14は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面は刷毛整形の後になでが加えられる。色調は暗褐色を呈し、胎土に白色粒、砂礫を含む。

15は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面はなで整形である。色調は暗褐色を呈し、胎土に白、黑色粒、砂礫を含む。

16は摩耗が著しい。外面は3本/cmの縦位刷毛整形



第9図 第3号粘土錠探坑実測図

である。焼成は不良、色調は明橙色を呈し、胎土に白、黒、赤色粒、砂塵を含む。

17は外面が3本/cmの縦位刷毛、内面は縦～斜位刷毛整形である。焼成は不良、色調は橙色を呈する。胎土に白色鉱、砂礫を含む。

18は外面が3本/cmの櫛状刷毛、内面はなで整形である。色調は暗橙褐色を呈し、胎上に白、黒色粒、砂礫を含む。

19は外面が4本/cmの斜位刷毛、内面は縦位刷毛整形である。焼成は不良で、色調は橙色を呈する。胎土に白色粒、砂礫を含む。

20は外面が1本/cmの縦位刷毛、内面は縦～斜位刷毛整形である。焼成は不良、色調は橙色を呈する。胎上に白色粒、砂礫を含む。

第3号粘土探掘坑（第9图）

調査区の南壁際で検出された。第1号埴輪窓跡より古く、大部分が重複する。平面形態は不整円形を呈す

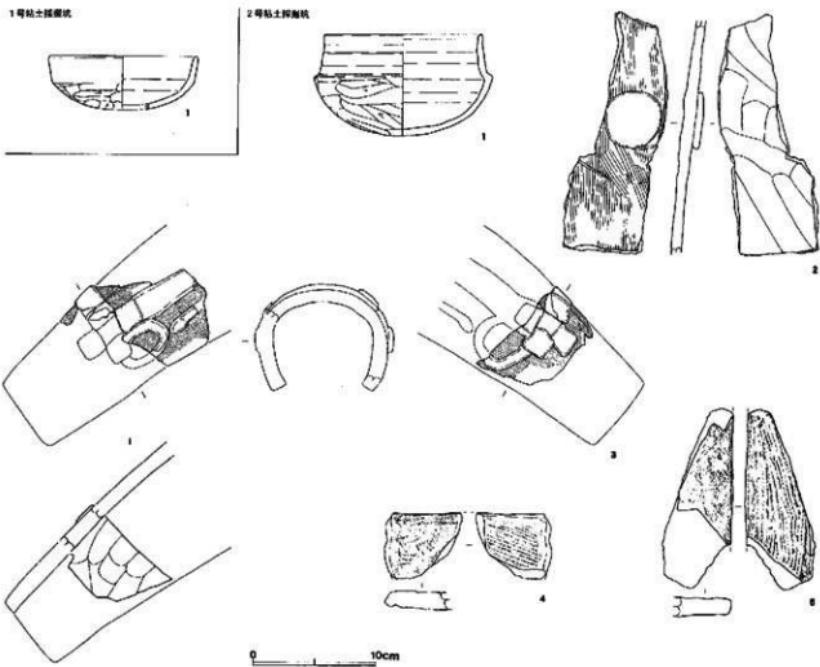
ると思われ、垂直に近い角度で掘り込まれる。北西の壁はややオーバーハングしていた。確認面から深さ0.7mまで掘り下がったが、表土が崩れ易い状況であったため、底面までの掘削を所念した。遺物はほとんど出土しなかった。

3 土壌

第1号土壤 (第13図)

調査区南東部で検出された。第2号粘土探掘坑を切る。平面形態は長方形であり、長径約2.6m、短径約0.8m、確認面からの深さ0.19mを測る。主軸はほぼ北を向く。形態から中世頃の所産と考えられるが、この時期の遺物は出土しなかった。

遺物は埴輪の底部破片が出土した。外面は3本/cmの縦位刷毛、内面は横～斜位刷毛整形である。色調は明橙色を呈し、胎土に白、黒、赤色敷、妙礫を含む。



第10図 粘土採掘坑出土遺物(1)

4 グリッド出土遺物

第14図1は倒木痕から、やまとまつて検出された。推定口径30cm、推定器高41cm、底径4.6cmを測る。焼成は不良、色調は鈍い橙色を呈する。胎土に白、黒、赤色粒、多量の砂礫を含む。

2は戦持ち人の盾の縁辺部と思われる。丁度貼付部分で破損している。盾には鐵と思われる武器が伴っていたと思われ、上部にその先端部が貼付されているのが看取される。刷毛目は7本/cmで、表にはジグザグに沈線が施される。

3は形象埴輪である。表面のみ薙存する。刷毛目は9本/cmである。色調は明橙色を呈し、胎土に黒、白色粒、砂礫を含む。

4～13は円筒埴輪である。4～8は口縁部である。

4は外側が5本/cmの斜位刷毛、内面は横位刷毛整形である。焼成は不良、色調は灰褐色を呈する。胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。

5は摩耗が著しい。内面は斜位刷毛整形である。焼成は不良、色調は明橙色を呈する。胎土に白、黒、赤色粒、砂礫を含む。

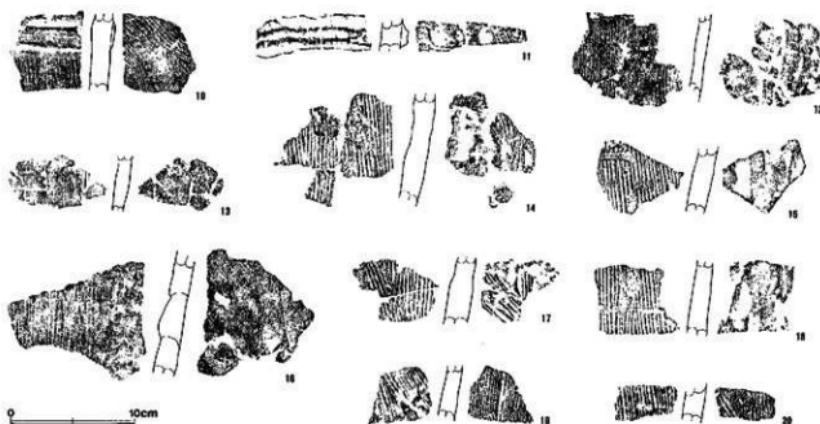
6は外側が8本/cmの縱位刷毛、内面は横位刷毛整形である。焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。

7は外側が7本/cmの縱位刷毛、内面は横～斜位刷毛整形である。焼成は不良、色調は赤褐色を呈する。胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。

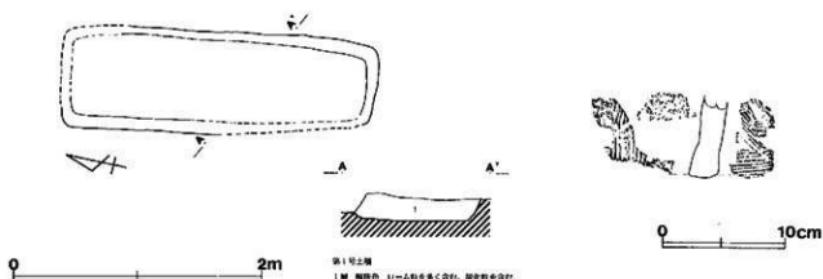
8は外側が4本/cmの縱位刷毛、内面は横位刷毛整



第11図 粘土採掘坑出土遺物(2)



第12図 粘土採掘坑出土遺物(3)



第13図 第1号土塚及び出土遺物

形である。焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。

9は外側が7本/cmの縦位刷毛、内面は継～斜位刷毛整形である。色調は橙色を呈し、胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。

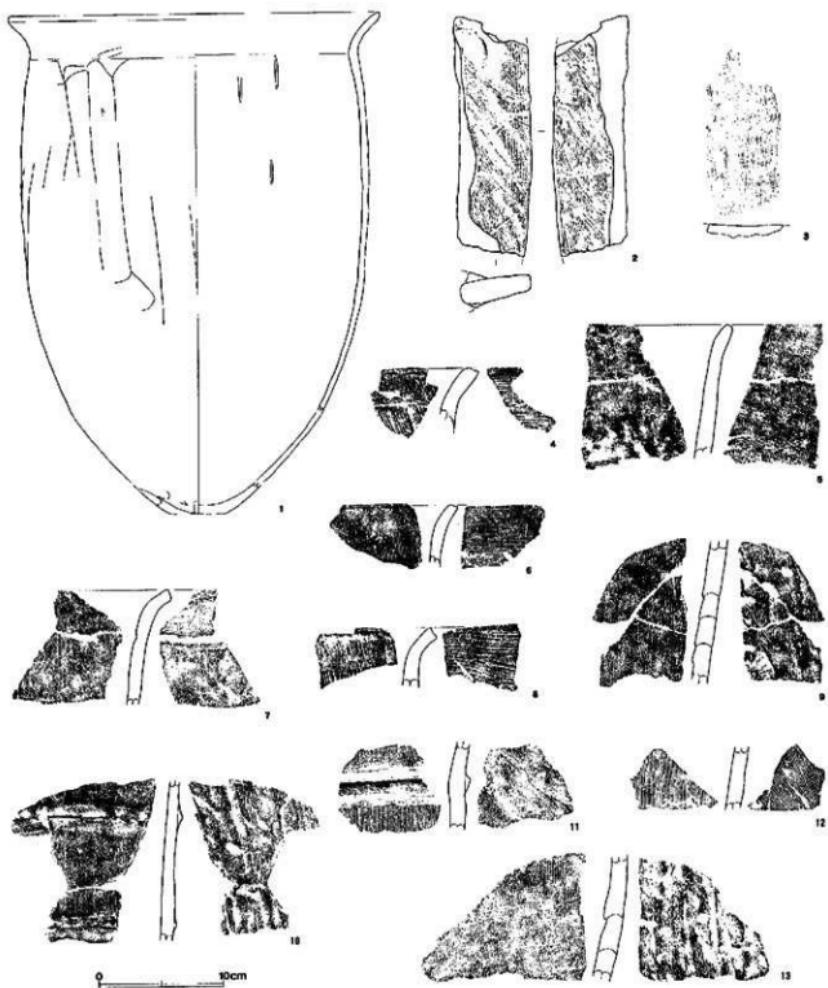
10は断面三角形の突帯が施される。外側は7本/cmの縦位刷毛、内面は刷毛整形の後にヘラなどで加えられる。焼成は不良、色調は明橙色を呈する。胎土に白、黒、赤色粒、砂礫を含む。

11は断面三角形の突帯が施される。外側に7本/cm

の縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形の後になでが加えられる。焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。胎土に白、黒色粒、石英、砂礫を含む。

12は外側が7本/cmの縦位刷毛、内面は斜位刷毛整形である。焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。胎土に白、黒色粒、砂礫を含む。

13は外側が6本/cmの縦位刷毛、内面は継～斜位刷毛整形である。色調は明橙色を呈し、胎土に白、黒、赤色粒、砂礫を含む。



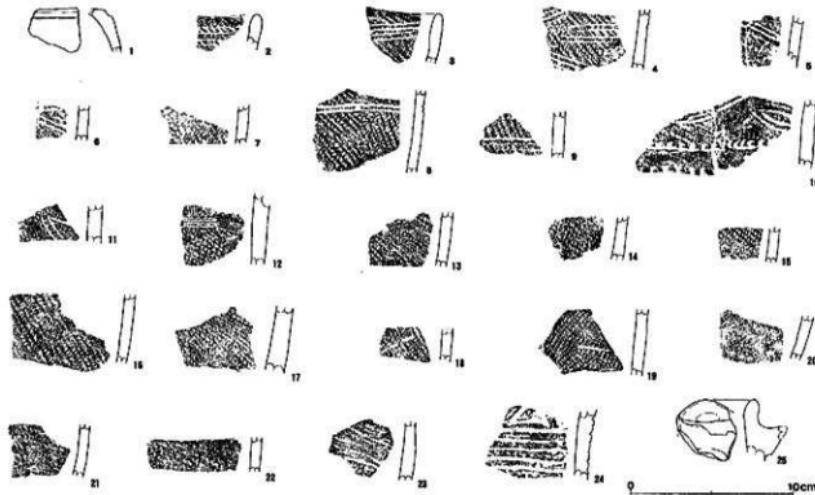
第14図 グリッド出土遺物

5 縄文土器

第14図1～23は諸磯a式の範疇でとらえられるものである。1は鉢形土器の口縁部付近の資料と思われる。肩部は丸みを帯び、口縁付近で強く内凹する。扁曲部外側には沈線が巡る。色調は淡褐色を呈する。2は横位の平行沈線内に爪形文が連続して施文される。地文にR Lの縄文が施される。3～7は竹管状工具による平行沈線で対角線文が描かれたものである。いずれも地文にR Lの縄文が施される。3は波頂部付近の資料である。5、6は文様の起点となる円形文が認められる。8、9はR Lの縄文を施文後に、平行沈線が横位に施された資料である。10、11は平行沈線により木葉文が描かれる。いずれも地文にR Lの縄文が施される。10は文様帶下端が2条の連続爪形文により区画される。12は4本単位の縦沈線で文様が描かれる。地文にはR Lの縄文が施される。13～18、20～22はR Lの縄文、19はL Rの縄文が施されたものである。23は条痕状の地文が斜位に施されたものである。色調は灰褐色を呈する。

24は諸磯b式の胸中位である。R Lの縄文を施文後に、竹管状工具により三角形の文様等が描かれる。焼成は良好である。

25は加曾利E式の小突起部分である。凹部の下は強く張り出し、その下に沈線による蘆子文等が描かれる。色調は淡褐色を呈する。



第15図 縄文土器拓影図

IV 市内遺跡確認調査

1 幡羅館跡

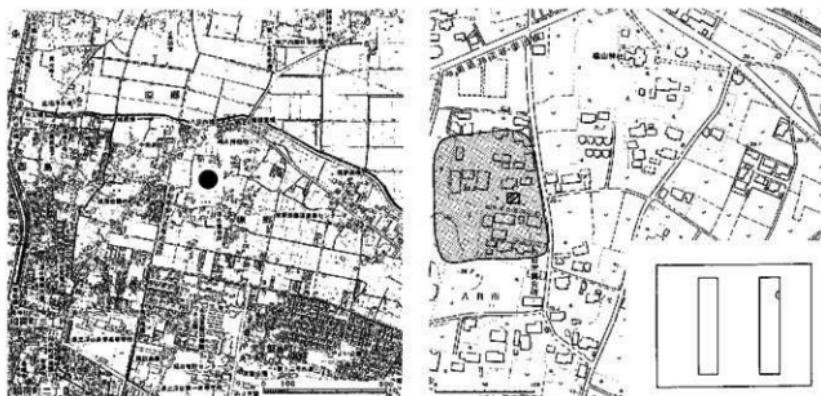
幡羅館跡の位置と確認調査の概要については第16図で示した。遺跡は備後台地の末端、妻沼低地との境界付近に位置する。面積約15,000m²の方形館跡である。過去に調査例はないものの、一部に土星が残っている。遺跡は、鎌倉時代に活躍した幡羅太郎の館跡と言い伝えられたきた。

平成11年8月26日、幡羅館跡地内の深谷市大字原郷字八口市360-1に個人住宅が建設される計画があることが明らかになった。市教育委員会は、平成11年9月14日に確認調査を行い、その結果、トレンチのほぼ全域で礫やローム、焼土が混じった面が検出された。この中にはカワラケ等の遺物も含まれており、地盤面或

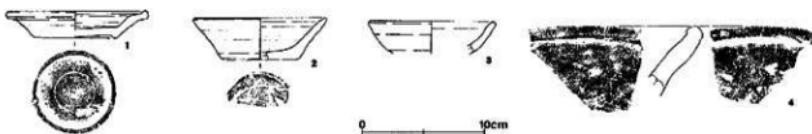
いは遺構の覆土であると思われる。また、調査対象地の北東部からは礫と焼土によるカマド状の遺構も検出された。

そのため、市教育委員会と原凶者である渡辺雅博氏とで協議を行い、遺構検出面と基礎の最下面との間に基準以上の保護層を設けることによる、遺跡の現状保存をすることとなった。

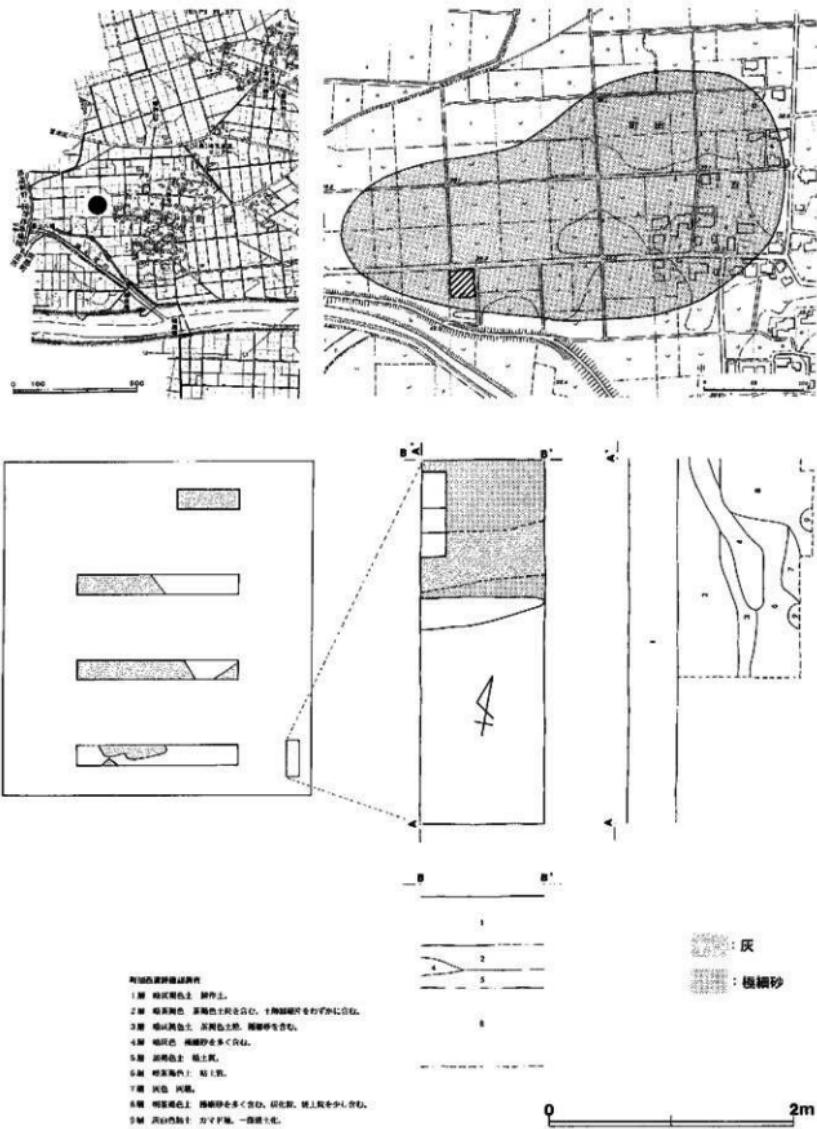
確認調査時に出土した遺物は、第17図に示した。1は高台をもつ灰釉皿である。口径11.6cm、底径6.7cm、器高2.2cmを測る。口縁付近で外反し、内面に強い棱を有する。口唇部は丸みを帯び、肥厚する。灰釉は外面に全体にかかり、底面にも少しかかる。内面の底面には、釉がかからぬ部分が円形に認められる。この部分には橙褐色の物質が円を描いて付着しており、重ね



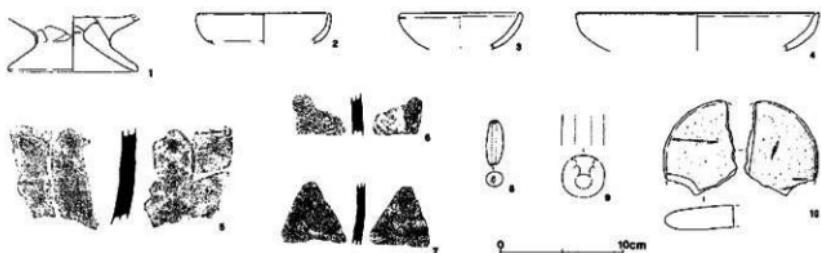
第16図 幡羅館跡の位置と概要図



第17図 幡羅館跡確認調査出土遺物



第18図 町田西遺跡の位置と概要図



第19図 町山西遺跡確認調査出土遺物

焼きの際に一体化したものと思われる。底面には同心
円状の整形痕が残る。

2、3はカワラケである。2は推定口径11.8cm、推定底径6.0cm、器高3.4cmを測る。口唇には凹線が認められる。色調は明橙色、胎土はさめが細かく、混入物をほとんど含まない。3は推定口径10.4cmを測る。色調は黄橙色を呈し、胎土に白、黒、赤色粒、石英をやや多く含む。

4は鉢の口縁部である。口唇は丸く肥厚する。焼成は不良、色調は暗灰褐色を呈する。胎土に鉄分粒を含む。外面に煤が付着しており、煮炊きにも使用したものと思われる。

出土した遺物はいずれも中世後期15世紀後半～16世紀頃のものと思われる。今後、幡羅創跡の時期及び性格を考えて行くうえで参考になろう。

2 町田西遺跡

町田西遺跡の位置と確認調査の概要については第18回に示した。遺跡は深谷市の北西部、岡部町や本庄村との市町境に位置する。地形的には委浜低地に位置する。発掘調査はこれまでに2回行われ、古墳時代後期～平安時代にかけての大集落であると考えられる。遺跡から南西にわずか約1kmの所には、棟沢郡正倉跡の中宿遺跡があり、これに近接する集落として注目される。

平成11年10月14日、町田西遺跡地内の深谷市大字町

田中歴訪河原288-1に自動車修理工場が建設される計画があることが明らかになった。市教育委員会は、平成11年10月18日に確認調査を行い、その結果、トレンチのほぼ全域で住居跡と思われる遺構が多數検出された。調査対象地の東南部は特に深く掘り下げたところ、古墳時代後期のものと思われるカマドが検出された。主軸は西を向く。右袖は極細砂を多く含む層に埋没しており、洪水等の影響を受けた可能性が考えられる。また8層が6層によって掘り込まれており、明確ではないものの、上部に別の遺構が重複していたものと思われる。遺物は6世紀～8世紀代の土師器、須恵器等が出土した。

そのため、市教育委員会と原因者である(有)猪野商事とで協議を行い、遺骸検査面と基礎の最下面との間に基準以上の保護層を設けることによる、遺跡の現状保存をすることになった。

確認調査時に出土した遺物は、第19図に示した。1
は土師器高坏である。調査対象地東南隅で検出された
カマド付近で出土した。推定底径10.4cmを測る。高台
と坏の付け根にはヘラ削り痕が残る。色調は橙色を呈
し、胎土に白、黒色粒を含む。古墳時代後期の所産と
考えられ、検出されたカマドの時期を示すものと思わ
れる。

2、3は土師器坏である。共に摩耗が著しい。2は推定口径10.8cmを測る。色調は鈍い橙褐色を呈し、胎土に白、黒色粒を含む。3は推定口径9.8cmを測る。焼成は不良、色調は明暗色を呈する。胎土に白、黒色粒

を含む。4は土師器皿である。推定口径10cmを測り、摩耗が著しい。色調は黄褐色を呈し、胎土に白、黒、赤色粒を含む。

5～7は還元焰焼成の須恵器である。5は焼成は不良、色調は灰色を呈する。胎土に白、黒色粒を含む。6は外側の叩きに平行当具が用いられる。内面は大部分が剥落している。焼成は良好、色調は灰色を呈する。胎土に白色粒を含む。7は焼成は良好、色調は灰色を

呈する。胎土に白色粒を含む。

8、9は土錠である。8は長さ2.8cm、直径1.0cmを測り、直径0.3cmの貫通孔を有する。色調は鈍い灰褐色を呈し、胎土に白、黒、赤色粒を含む。9は推定直径2.6cmを測り、推定直径1.0cmの貫通孔を有する。色調は黄褐色を呈し、胎土に黑色粒を含む。

10は砥石であろう。円形の砂岩砾を用い、表裏面とも溝状の使用痕が認められる。

V 結語

前章まで述べてきたように、割山遺跡の今回の調査では、埴輪窓跡1基、粘土採掘坑3基、土壙1基が検出された。遺物は埴輪の他に、縄文前期を主体とする縄文土器や土師器が出土した。約80m²という狭い範囲の調査でありながら、大変密度の濃い成果が得られた調査であったと言えよう。

縄文土器はこれまでの調査と同様に、諸種a式を中心とするものであった。いずれも小破片ながら、狭い範囲から数多く出土している。このことから、本遺跡内に該期の集落が存在していた可能性が高く、埴輪製作のための粘土採掘等で遺構の多くが破壊されたことが考えられる。しかし、これら古墳時代の遺構の間隙を絶って、縄文時代の遺構が残存している可能性もあり、今後の割山遺跡の調査では注意して精査する必要がある。

次に今回の第6次調査では、古墳時代の埴輪製作に関する遺構が多く検出された。遺構や遺物はいずれも古墳時代後期中葉のものとを考えられる。過去の調査で検出されたものも含めて、遺構の分布を第20図に示した。この分布状況から、若干の考察を加えてみたい。

第6次調査区の南側に隣接するのは第2、3次調査区である。この調査区の北西側には埋没谷が確認されており、南東側から北西へ向かって低くなるようである。西側で重複して検出された埴輪窓跡は、全てこの傾斜を利用して構築された登窓である。主軸は傾斜に

合わせて南東に向くものと、ほぼ南北に向くものとがある。報文中では、良好な風力を求めるために主軸を変えたと考察している。そして調査区の北側には粘土採掘坑が密集している。第6次調査区も粘土採掘坑密集域に含まれる。粘土採掘坑は狭い範囲に分布が限られており、良質な粘土を求める意識が強く窺える。この区域にも埴輪窓跡が多数構築されている。これらはいずれも粘土採掘坑の廃地を利用している。主軸は北、西、南と様々である。なぜ廃地を利用して埴輪窓跡を構築したのであろうか。第3次調査区の等高線による傾斜から考えると、第2次調査区の粘土採掘坑が東西に連なる部分は、若干低くなっていたと思われ、その南北両側にはわずかではあっても傾斜があったものと考えられる。南側の窓跡に主軸を北に向けるものが認められず、また第6次調査区における窓跡が主軸を北に向いていることからも傾斜は想定できよう。粘土採掘坑の廃地が利用されるのは、この傾斜の不足を補う意味を含んでいたことも考えられる。また窓跡を構築する際の労力を省く意味もあったと思われる。第2、3次調査区の南西部に密集する窓跡がかなり重複しているのもこうした理由が考えられている。

第6次調査区の北側の隣接地は第1次調査区であり、5基の窓跡が検出されている。主軸の傾きはほぼ北から西の間である。粘土採掘坑は重複していない。当時は傾斜があったのであろう。



第20図 割山遺跡遺構分布図

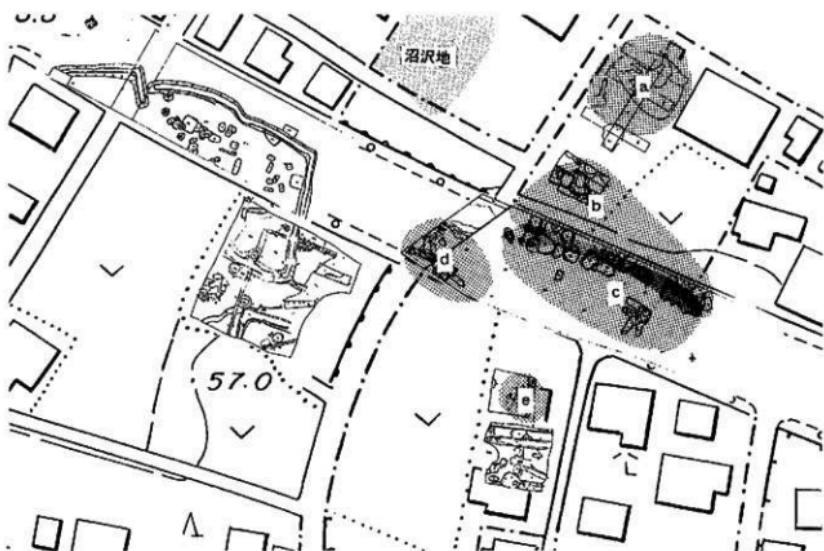
また遺跡の南側の第5次調査区からは墳窓状遺構が検出されている。遺構に伴うピット内からは精選された白色粘土が出土しており、或いは埴輪を製作する工房跡の可能性もある。

これらの遺構分布状況をまとめると次のようになる(第21図参照)。北側から(a)埴輪窓跡、(b)粘土採掘坑と粘土採掘坑の隙地を利用した主軸を主に北に向けた埴輪窓跡、(c)粘土採掘坑と粘土採掘坑の隙地を利用し主軸を北に向かない埴輪窓跡の順序で分布する。そして西側には(d)傾斜地を利用した埴輪窓跡が密集し、遺跡の南部には(e)埴輪の製作工房跡が存在する可能性がある。

割山遺跡は、古くは「ししの水浴び」と呼ばれる沼沢地と、古墳ではないかと思われる様に1か所だけ高く盛り上がった場所が存在していたと言われる。しか

し遺跡の地形は、昭和の初めに行われた耕地整理のためにほとんどが変化してしまったものと思われ、現地形からは当時の状況を窺い知ることはできない。だが最近、現在の桜ヶ丘保育園の園庭を試掘調査する機会に恵まれた。その結果、遺構や遺物は検出されなかつたものの、園庭の西側半分が急激に落ち込んでいるのを確認した。ここが沼沢地であったものと思われ、古墳時代の埴輪製作においてもこの場所を利用した可能性がある。今後の調査により、埴輪製作の全容が更に明らかになることを期待したい。

最後に改めて、この発掘調査に深いご理解とご協力をいただいた松木信幸氏をはじめ、割山遺跡の発掘作業、整理作業に携わり、文化財を記録保存して後世に残すことにご尽力いただいた皆様に敬意を表する。



第21図 割山遺跡概要図

報告書抄録

ふりがな	わりやまいせき（だい6じ）／しないいせきかくにん							
書名	割山遺跡（第6次）／市内遺跡確認							
副書名	深谷市内遺跡類							
巻次								
シリーズ名	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第64集							
編著者名	知久裕昭							
編集機関	深谷市教育委員会							
所在地	〒366-0823 埼玉県深谷市本住町17-3 Tel048-672-9581							
発行年月日	2000（平成12）年3月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 ("")	東經 ("")	調査期間	調査面積	調査原因	
割山遺跡	深谷市大字上野台割山2833-12 2888-4	11218	80	36°10'51"	139°16'54" i 19990430	80m ²	個人専用 住宅	
所 収 遺 跡	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 閣 事 項			
割山遺跡	埴輪遺跡	古墳時代後期	埴輪塚跡1基 粘土採掘坑3基 上塚1基	埴輪 土師器 網文土器				

写 真 図 版



調査区全景

図版 2



第1号埴輪窯跡遺物出土状況



第1号埴輪窯跡、第3号粘土探掘坑

图版 3



第1、2号粘土探掘坑



第2号粘土探掘坑遗物出土状况

図版 4



第1号埴輪窯跡1



第1号埴輪窯跡出土遺物(1)

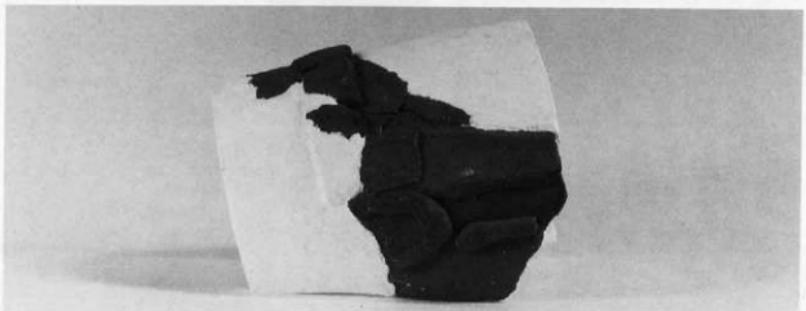


第1号埴輪窯跡出土遺物(2)

图版 5



第 2 号粘土探掘坑 1



第 2 号粘土探掘坑 3



第 2 号粘土探掘坑出土遗物

図版 6



第2号粘土採掘坑 6

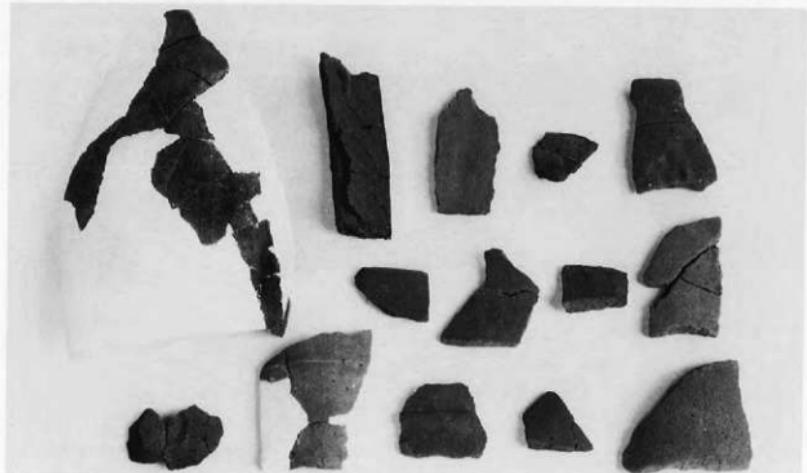


第2号粘土採掘坑 7

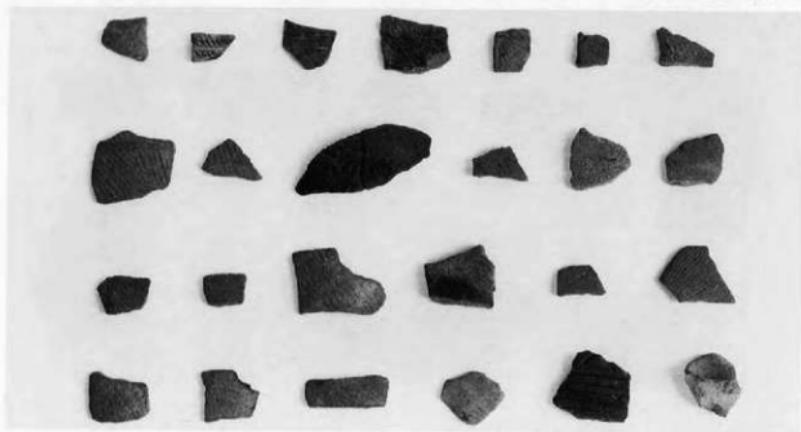
図版 7



第1号粘土探掘坑 1



グリッド出土遺物



縄文土器

図版 8



幡羅館跡確認調査出土遺物(1)



幡羅館跡確認調査出土遺物(2)



町田西遺跡確認調査出土遺物

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第64集

割山遺跡（第6次）／市内遺跡確認

— 深谷市内遺跡ⅩI —

印刷 平成12年3月27日

発行 平成12年3月30日

発 行 深 谷 市 教 育 委 員 会
